

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2007.12) 8巻1号:66～68.

大学入学試験における面接試験の意義と将来像

渡部 剛

依 頼 稿 (報告)

大学入学試験における面接試験の意義と将来像

渡 部 剛*

はじめに

医療の現場では、患者さんやその家族、医療チーム内の同僚などとの意思疎通が欠かせない。このため、医療職者には専門的知識や思考力などの知的資質だけでなく、他者とのコミュニケーション能力も求められる。これらの能力はもちろん入学後の学部教育で培われる部分も大きいですが、限られた期間・リソースによる教育効果を考えるならば、入試の段階でできるだけ医師・看護師としての適性・資質を有する学生を選抜したい。このような意図で、医療系の大学・学部では面接試験が入試科目として導入され、従来の筆記試験では評価が困難であった対人能力が入試でも評価されるようになってきた。

本学における入試においても、既に昭和54年度から様々な形で面接試験が取り入れられている。さらに平成14年度入試からは面接試験中心で選抜するAO入試も導入された。一方で、面接試験の実施にあたっては、多数の教員・職員の方々に御協力いただくことが不可欠である。本稿では、平成17年度から面接試験の実務に携わっている経験を踏まえて、入学者選抜における面接試験の意義や有効性について実際のデータを挙げ

て解説し、今後の面接試験のあり方について論じてみたい。

面接試験に関する疑問と分析

(1) 面接試験は学生の選抜に有用か

入試の実務に携わっていると、しばしば、「そもそも本学の入試の科目として面接試験は必要なのか」という根源的な問いが寄せられる。この問いに対して、「良い学生を選抜するために面接試験が必要である」ということを実証するのは、実は難しい。それは、「良い」学生であることを判定する基準や時期が一義的に決められないためである。一方、「本学学生としての適性・資質に疑問がある」学生が、どの入試を経て入学したかについては、ある程度、根拠資料に基づいて議論できる。

別表1は、平成19年3月1日現在の医学科在籍学生(平成13年度~18年度入学者)のうち、入学後に心身の不調、成績不振などの理由で休学・留年したことがある者、およびこの期間の入学学生で既に中途退学した者を、入試区分別に集計したものである。なお、この集計には外国留学で下の学年に移動した学生(2名)は含まれていない。

別表1 入試区分別の中途退学者数および留年・休学経験者数

	定 員 (C)	中途退学者 (A)	休学・留年経験者(B)	(A + B)/C (%)
後 期 日 程	320名 (54.2%)	5名 (83.3%)	31名 (77.5%)	11.3%
前 期 日 程	120名 (20.3%)	0名 (0%)	6名 (15.0%)	5.0%
A O 入 試	60名 (10.2%)	0名 (0%)	1名 (2.5%)	1.7%
推 薦 入 試	50名 (8.5%)	1名 (16.7%)	1名 (2.5%)	4.0%
学 士 編 入 学	40名 (6.8%)	0名 (0%)	1名 (2.5%)	2.5%
合 計	590名 (100%)	6名 (100%)	40名 (100%)	全体平均 7.8%

*旭川医科大学 解剖学講座 (顕微解剖学分野)

この表から明らかなように、入学後にさまざまな問題が顕在化し休学・留年・中途退学した者の大部分（留年31名（留年者全体の77.5%に相当）、退学5名）は、後期日程入試を経て入学した者である。一方、面接試験を経て入学した学生（後期日程以外の入試区分）で休学・留年した者は9名（留年者の22.5%）であり、中途退学した者も1名にとどまる。さらに、単回の個人面接のみを経て入学した学生（前期日程入試）よりも、複数回の面接を経た学生（AO入試、推薦入学、学士編入学）の方が、休学・留年・退学する率が低い。現在、医学科の学生定員の上では、筆記試験だけで入学した後期日程入学学生と何らかの面接試験を受けて入学した学生の比がほぼ1：1であることから、入試で面接試験を課すことは、労力がかかるものの、適性に問題がある学生を排除する上では一定の有効性があるものと思われる。

(2) 集団面接は個人面接より劣っているか

面接の方式として、個人面接の方が個々の受験者の適性や能力を評価する上で優れているのではないかという意見をしばしば耳にする。しかし、本質的に入試とは相対的評価によって判定されるものであり、複数の受験者を比較して評価できる集団面接の方が、その趣旨に合致している。また、個人面接では、受験者に関する様々な情報（年齢や出身校、出身地、保護者の職業など）が面接担当者に知らされるため、ややもすると受験者本人の実力ではない要素によって評価点が影響される危険性がある。さらに費用（労力）対効果の面から見ても、動員できる面接担当者の総数が同じであれば集団面接の方が一人の受験生あたりの面接担当者の数を多く設定でき、個々の面接担当者の評価基準の偏りに起因する悪影響を軽減できる。

集団面接による評価結果の妥当性に関しては、平成18年に実施されたAO入試の結果を利用してレトロス

ペクティブに分析してみた。別表2は、この年の医学科AO入試1次の集団面接試験での「否」評価の数と、2次試験での最終的な合否結果の関係をまとめたものである。この年のAO入試の1次試験の集団面接では、各面接担当者が「合」「否」の2段階で受験生を評価し、その集計結果が1次試験の合否判定の際に用いられた。ただし、この年のAO入試では、1次試験の成績は2次試験の評価には持ち越さず、最終的な合否を決定する総合点には、この1次試験での集団面接の成績は加算されていない。

この表から明らかなように、1次の集団面接成績が2次試験成績に加算されていないにもかかわらず、結果として、1次の集団面接で多くの「合」判定を得たの方が最終的に合格する率が高かった。逆に、1次の集団面接で多くの「否」判定がついた者は、2次試験に進むことはできても最終的には不合格となる率が高く、1次試験の集団面接で各面接担当者が付けた評価が受験者の人物評価としてかなり妥当なものであったことがわかると思う。また、各面接担当者に参考につけていただいた各受験者の5段階の評価点を元に、事後に入試課でさまざまなシミュレーションを行った分析結果でも、一次の集団面接試験で高評価を得た者が最終的な合格者と一致する傾向が認められた。

以上の考察・分析より、費用（労力）対効果や評価の妥当性を含む多くの観点で、個人面接よりも集団面接の方が優れている可能性が示唆された。

ま と め

本学入試における面接試験の将来像

これまで、入試科目としての面接試験の有用性や妥当性に関して、根拠資料に基づく分析や議論がほとんどなされて来なかった。しかし、本稿で述べた簡単な

別表2 医学科AO入試1次集団面接成績と最終合格者の相関

「否」評価の数	1次合格者	最終合格者数	不合格者数	2次試験での合格率
0 個	16 名	10 名	6 名	62.5 %
1 個	13 名	5 名	8 名	38.5 %
2 個	13 名	4 名	9 名	30.8 %
3 個	6 名	1 名	5 名	16.7 %
計	48 名	20 名	28 名	

注：「否」評価の数が4個以上の者（1次受験者88名中12名）で1次試験合格者はいない。

分析からも示唆されるように、面接試験を課すことは少なくとも適性の乏しい学生を排除する上ではかなり有効であると思われる。もちろんその前提として、入学してからの学業に十分な知的資質が学力試験などの方法で保証されることが必要である。個人的な見解ではあるが、将来的には、一般入試を含む本学のすべての入試で学力試験（筆記試験）に加えて面接試験を導入すべきであると考えられる。

その際に、費用（労力）対効果などの点を考慮すれば、一般入試の面接試験としてまず実施すべきなのは、個人面接ではなく集団面接であろう。また、面接試験成績の使い方は、学力試験成績に単純に加算し総合点で判定するというのではなく、むしろ面接試験での評価点の合格基準下限値を決め、その基準を超えた受験者集団から学力試験の成績順に合格者を選抜するのが良い。あるいは、面接試験での評価点が特に低い者の取り扱い方法や評価基準を見直しても良いだろう。さらにこのような面接試験を正しく機能させるためには、すべての受験生に無条件で満点を付けるような面接担当者としての資質に欠ける教員を面接試験から排除する（代わりに、そのような教員には学力試験や大学入試センター試験の監督業務を担当していただく）こと

も必要になる。

一方、AO入試や学士編入学試験、さらには今年から導入された地域枠選抜では、本学を特に選んで志望した動機も問われることになる。その場合には、上述した集団面接に加えて個人面接を行い、各受験者の志望動機や意欲などを個別に評価する必要がある。また、このような入試区分では、上述した一般入試とは逆に、学力試験で合格基準下限値を設定して一種の資格試験のように用い、その基準を超えた受験者集団から面接試験の成績順に合格者を選抜するという方法も考えられる。

いずれにせよ、各面接試験の特質、利点・欠点、費用（労力）対効果などをきちんと分析・把握した上で、より優れた資質を持った学生をより多く本学で確保できるよう、今後も入試方法の検討・改善は続けていくべきである。

なお、本稿は、平成19年度に発行予定の入学センター年次報告書に寄せた原稿を一部改変したものであるが、入学者選抜における面接試験の意義や重要性を広く学内の方々に理解していただきたいと考え本誌に転載・寄稿した。